The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	村田義人氏に聞く ： 旧制大阪高等学校の思い出
Author(s)	菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2009, 59(2), p. 99-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26000
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【資料】

村田義人[†]氏に聞く

－旧制大阪高等学校の思い出－

菅　真城[‡]・阿部武司[‡‡]

2007年12月11日
於　大阪大学湯川記念室
（大阪府豊中市）

大高に入学した動機

菅　今日は旧制大阪高等学校同窓会長でいらっしゃいます村田先生に，大阪高等学校に関する思い出を中心に，ご自由にお話しいただければと思います。

まず，そもそも先生が大高に入学しようと思われたのは，どういったところからなのでしょうか。

村田　藤澤黄坡という漢学者をご存じですか。泊園書院という大阪の有名な漢学塾があったのですが，藤澤東畡・南岳・黄坡と。私のおやじは黄坡さんの弟子だったのですが，黄坡さんの息子である藤澤桓夫が大高の２回生。

藤澤桓夫は，中学校のときから文学活動をやっており，『コギト』という雑誌を発行したりしていました。あのころは，大高の学生が新しい文壇のリーダーとして活躍していた時代で，その中心人物が藤澤桓夫なんです。藤澤の周辺には，秋田実や田中克己など，いろいろな人が集まってくる。

その黄坡先生の息子の学校だということで，僕が大高に行くことを，おやじは非常に喜んでいました。ただ，そのころは４年からも，５年からも受けることができる。私は３年のときに肺門リンパ腺という肺結核の一歩手前の病気をやっていて，中間考査から期末考査まで長欠して，留年すれすれのところまで休んでいたことがありました。

そして高等学校を４年から受けるということで受験勉強をしていたら，おやじが「ちょっと，うまいもんを食いに行こう」と言う。おやじはグルメ人間ですからついていくと，難波の家から有馬まで連れて行かれて，「おまえは，来年受けたらいいんだから。このままでは身体をつぶす。ここで，ぼけっと試験の日まで過ごせ。」と言われた。４年のときはそういうことで，おやじの心配もわかると思って言いなりになっていたんです。

そして，いよいよ５年で受けるのですが，私は中学校のときに，わりあい哲学をやっていて，西田幾多郎や鈴木大拙などにあこがれていたので，５年の担任の先生に「君，どこを受けるんだ」と問われたとき，「金沢の四高にしようと思います」と言ったんです。そうしたら，その担任の先生が「あかん」と言う。「君は３年のときに肺門リンパ腺をやっているやないか。金沢あたりに行けば再発するのに決まっているから，やめなさい。充分通るから大高にしなさい」

---

† 旧制大阪高等学校同窓会長
‡ 大阪大学文書館設置準備室講師
‡ 大阪大学大学院経済学研究科教授

と。

そういうこともありましたし，おやじの勧めもありましたから，藤澤桓夫や秋田実など，いろいろな人が活躍している大高へ行こうと考えて出願したんです。

菅　四高に行きたかったというのは，哲学関係の有名な先生がいらっしゃったからということなんですか。

村田　ええ。先生はおりませんけれども，西田幾多郎や鈴木大拙が出たのも四高ですし，そういう哲学にもあこがれていたものですから，何となく思っていたわけです。

それと，大高ではちょっと危ないのではないかと思っていた(笑)。われわれのころは，三高・一高・大高以外の高等学校に行くのは「都落ち」と言っていて，大高ではちょっと危ないから都落ちしようかなと。そういうこともあって「四高にします」と言ったら，担任の先生に怒られて。担任の先生も，よく個人的なことを知っているなと思って感心しました。それで大高に行くことにしたんです。

中学校までは，ＰＴＡの何かがあると母親が行っていましたけれども，高校については，おやじ自身が大高が好きなものですから，入寮式も入学式も卒業式も，みんなおやじが出ました。

学徒出陣

村田　卒業式については，式の前に出陣したので，僕自身は卒業式に出られなかった。ちょうど大阪駅を出発して博多へ向かうとき，僕が将校の荷物を担いで駅の階段を上がっていると，これから卒業式に行く同じクラスの同級生にばったり出会った。だから，卒業式の日に出発したわけです。

菅　たしか，先生は第２回目の学徒出陣にあたると思うのですが，そのときは学校で壮行会とか，そういったものは開かれなかったのでしょうか。

村田　第１回目のときは華々しくやりましたが，第２回目のときはやらなかったですね。そんな暇はなかったような感じです。

菅　いきなり卒業までいってしまいましたが，戦争の影響があって，先生のときは在学期間が２年半という半年短縮のころだったと思います。入学したころから戦争の影響とか，軍事教練みたいなものはカリキュラムのなかにありましたか。

村田　ええ，もちろんありました。入学する前から，文科へ行けば徴兵猶予がなくなるかもしれないといううわさはあったんです。それで周辺からは理科へ行けと。成績は理科のほうがだいぶ良かったのですが，いろいろ考えて，たとえ文科の徴兵猶予がなくなっても，それはしかたがない。やはり俺は文科だということで，あえて文科を選んだんです。

英語教育

村田　私は文科の甲類を選びました。甲類というのは英語が第一外国語で，ドイツ語が第二外国語。そのころはドイツのほうが非常に景気がよくて，文乙のほうが人気があったのですが，私はどうして文甲にしたかというと，英米と戦うことになったでしょう。それなら，やはり英語をやらなければいけないと思ったんです。

私は英語が非常に不得意だった。英語が不得意な一つの理由は，西田幾多郎にも責任がある。というのは，西田幾多郎が『思索と体験』かどこかで，「語学はほどほどにすべし」と漏らしていたことがある。いくら一生懸命にやっても，ネイティブよりうまくはならないというようなことを書いていたんです。ああ，そうだと思って，あまり身を入れて英語をやる気にならなかった。

それがばかだと判ったのは，ネイティブの言葉に近づくだけが語学ではない，言葉の本質というか，言葉の面白さを把握しなければいけな

い。これが大高で教わった一つのことです。

英語で全田忠蔵という面白い先生がいたのですが，１学期の最初の試験でびっくりしたんです。試験を見ると易しい問題だから満点だと思っていたら，甲乙丙丁の丁が付いている。丁は落第点なんです。それは僕だけではなくて，たくさんの人が丁だった。

なぜ丁なのかというと，全田先生には，いくつかのポイントがあるんです。例えば英語の「hill」というのを，普通，われわれは「丘」と訳すでしょう。「丘」と訳して疑問に思っていない。ところが，その先生に言わせると，「hill」には，台形のもあるけれども，そうでないのもあるのだと。ここの状況では，これは小山でなければならない。だから，ここでは「hill」を「丘」と訳してはだめだ，「小山」と訳しなさいと。

そういうたぐいのことで，ここを丘と訳していたら，それだけで，丁とされる。みんなそれで丁をもらって，びっくりして，その先生のポイントをきちんとつかむようになりました。そのときに言葉の面白さというのを学んだと思います。

菅　直訳的に単語カードを覚えるのではなくて。

村田　中学式の単語の訳ではあかんのです。「narrow」でも「狭い」と訳すでしょう。ここの場合には「狭い」ではなくて「細長い」と訳さないとだめと。それを一つ間違えても，丁なんです。言葉の面白さというのを教えてもらったと思いますね。

印象に残っている先生

村田　いろいろな名物先生がいて，どの先生もみんな面白かったですが，印象に残っている先生としては，やはり中学のときにかなり哲学づいていましたから，哲学の先生の野田又夫さん，五十嵐達六郎さん，森三樹三郎さん。森三樹三郎さんは中国哲学ですが，３人とも大高の出身で大高の教授になっている。

３人とも本当に印象深かったのですが，そのなかでも五十嵐達六郎さんは，僕と同じ中国戦線へ行って病気で亡くなられたんです。その戦線には作家の阪田寛夫さんも行っていて，五十嵐さんと同じ病院にいたので，『五十嵐日記・解題』という小説を書きました。

私は，衡陽作戦途中で倒れて，入ったのは武漢大学を接収した病院でしたが，その武漢大学から漢口の病院へ移ると，その病院には，私が入る前に五十嵐達六郎先生も阪田寛夫さんも入っていたんです。

というのも，私が世話になった軍医も大高出身で，五十嵐達六郎と同期のラグビーの選手だったんです。彼があるとき何かで私が大高出身だと判り，「何だ，おまえ大高か」と。「ここに五十嵐さん，来てたんやぞ。いま北京へ行ってるはずや。こんなとこにおったら死んでしまうから，おまえも北京へ送ったる」と言われたんです。漢口では物資が乏しく，栄養がとれなかったからです。

それで北京行きになるかと思っていたのですが，そのすぐあとに軍医が病気になって入院してしまったから，僕は次の北京行きのリストに入らなかった。しかし，入っていたら命はなかったんです。その北京へ行った人たちは看護婦さんも含めて，途中で襲撃されて全員がやられてしまったからです。そんなことで，私は何度も，もうだめだというところで助かってきているのですが，五十嵐さんは北京から大連へ行って，大連で亡くなったのかな。五十嵐さんは私の担任でもあったわけで，非常に印象が深いのですが，その五十嵐さんはギリシャ哲学の大家ですので，ギリシャ哲学をみっちり教えてもらい，野田さんからはデカルトを中心とした近代哲学を教わり，森さんからは中国哲学を教わった。そして京大の哲学科へ行ったんです。

すると，すごい先生にばかり習っているではないかと，みんなにうらやましがられました。

高等学校で，そんな一流の哲学者に教わることができたのは，ほかの学校では考えられないことだったと思うんです。

菅　大学へ行って学ばれた哲学と，高等学校時代に学ばれた哲学というのは，レベル的にそんなに違いはないものでしたか。

村田　野田先生は，私が京大にいるときに京大の教授として来られたので，大高と京大との２回習っているのですが，野田先生に言わせると「大高のほうが面白かった」と。京大生はいろいろなところから来ていますから，当然，知っていなければいけないことを知らなかったり，一からやらなければいけない。大高の連中を教えているときは，そういうことはなかったからと言われていましたね。

友人の影響

村田　その野田先生が京大の教授に来られるときには，家を引っ越しされるので，僕や僕の友だちとかも手伝いに行きました。その僕の友だちで，僕にものすごく影響を与えたのは橋本峰雄。この人は神戸大学の倫理学の教授ですが，法然院の貫主でもあり，とてもユニークな映画評論家でもあります。『朝日新聞』に映画時評を書いていたのですが，これは非常に評判でした。哲学的というか，とらえ方の視点が面白いと有名だった。

その橋本峰雄は徳島県の出身ですが，寮で私と同じ部屋にいたので，当然，いろいろな影響を受けました。例えば，寮の消灯時間は11時か12時だったと思うのですが，その時間がくると寮の部屋の電気は消える。しかし，廊下とトイレの電気だけはついています。

それで消灯時間になったのですが，橋本は読んでいる本があるので廊下で立ったまま読んでいた。そして翌朝私が起きて廊下に出ると，まだ同じ姿勢で読んでいるんです。びっくりしました。身体つきは僕よりはるかに頑丈ですが，「何を読んでるんだ」と聞くと，「『カラマーゾフの兄弟』だ」と言う。橋本がそんなに熱を入れて読むんだったら，これは読んでおかなければいけないと思って，私も『カラマーゾフの兄弟』を読みました。このころは，とにかくドストイェーフスキーやトルストイの長編小説をやたらに読みました。橋本の影響は非常に大きいと思います。

そして，だいたい文科に行った連中は，文学のほうでは食べていけませんから法科か経済へ行くんですが，橋本は僕に「君は役人では大成せんやろ」と言った。そんなタイプではないと。私自身も自分でそう思っていましたが，こんなことは本当に信頼する親友でなければ言えないアドバイスです。そして「俺は哲学へ行く。哲学へ来い」と。その年に哲学に行ったのは僕と橋本の２人だけでしたが，とにかく野田先生や五十嵐先生を慕って京大の哲学に行くことになりました。

影響を受けた本

村田　その昭和17年ごろに私が一番影響を受けた本は，波多野精一の３部作『宗教哲学序論』『宗教哲学』『時と永遠』。これは毎年１冊ずつ出ており，最後の『時と永遠』が出たのが昭和17年ですが，私は全部，出る前から本屋に予約して購入していました。そして特に『時と永遠』を読んで，波多野精一というのはクリスチャンの哲学者で，世界的にも非常に有名な日本の宗教哲学者ですが，私は何とかして波多野さんの講義を受けたいと思いました。

そのとき，西田幾多郎は退官して鎌倉にいて，まだ田辺（元）さんはおられましたが，波多野さんも教授でしたから，波多野さんに習いたいと思っていたんです。ところが先ほども申しましたように，入学する前に入隊ということになってしまって，戦争から帰ってくると，もう波多野さんも辞めておられた。結局，直接教

わることはできませんでした。

波多野精一の本というのは，どの本も，びた揺るぎもしない文章というか。ですから，あまりたくさんの著作は出しておられないのですが，そのかわり，これぞ哲学という感じが本当にしますね。特に『時と永遠』のなかに「他者への生」という言葉が出てきますが，自己への生というよりも他者への生を生きる。そこに本当の生があると。ですから『時と永遠』のキーワードは，「他者への生」ということになるかと思います。まだ僕は行っていないのですが，波多野さんのお墓には「他者への生」という言葉が刻んであるそうです。

そういうことで学徒出陣の世代だったものですから，自分の死というのが目の前に迫っている。いまの人と違うところは，そこらへんではないかと思います。長くても２年以上は生きていられないという状況で，それを僕は死刑囚的状態と言っていますが，そういう状況で何かの悟りを開きたいと切望していました。

そうは言っても，すぐに宗教へ入るというのは，いろいろ抵抗があってできないと言いますか，近代的な科学的な知識の洗礼を受けていますから，まず哲学で悟りたいと思ったわけです。特に田辺元先生の哲学では，哲学自身が死んで復活するという宗教的な業を実践するという考え方がありまして，田辺さん流の哲学で何とか悟りたいと思ったのですが，そう簡単には悟れない。だが悟れないままでも行かなければしようがない。

そのときに私が考えたのは，お釈迦さんでも，なかなか悟れなかったではないかと。お釈迦さんは王子に生まれて，何不自由ない環境だったけれども，人間同士のはかなさを見て，なんとか本当の悟りをつかまえたいと，王城を捨て，妻を捨て，子どもを捨てて出家する。そして偉い先生について修業をするのですが，いくら修業をしても悟れない。悟れなければ出家した，あるいは妻や子どもを捨てた意味がないわけですから，非常に焦ったと思います。しかし，いくら焦っても，焦れば焦るほど悟れないという状況があった。

そのときにお釈迦さんは，悟ろうとしているから，悟るという煩悩に捕まえられているから悟れないと悟った。悟ろうという煩悩からも脱却できなければいけないということに，まず気がついたと私は思うんです。それで修業の場を離れて，一人静かに菩提樹の下へ行きます。ですから，一緒に修業していた人たちからすると，お釈迦さんは修業に耐えられなくなって脱落したと思ったと思うのですが，お釈迦さんとしては，悟ろうという煩悩からも離れなければいけない。そのためには一度，すべてのしがらみから離れて静かに瞑想しようと，菩提樹の下へ行き，ついに本当の悟りを開いたと言われているわけです。

ですから私は，お釈迦さんだって，そうやって悟れなくて苦しんだ時代があったではないかと。俺ごときが，そんなに簡単に悟れるわけがない。これは悟れないままでいくとしてもしかたがないと。それも，ある意味では一つの悟りだったと思います。そういうふうに自分で決着をつけることで，なんとか気持ちがすっきりしましたからね。

徴兵逃れ

村田　とにかく，そういう状況のなかで第二次学徒出陣をすることになるのですが，そのときに僕らの学年だけは，まだ徴兵逃れの道があったんです。われわれ９月卒業の文科の連中なら，国立の医学の単科大，岡山医大や金沢医大という国立医科大，もしくは帝大の農学部に希望を出せば，試験も何もなしで無条件で入れてくれるという道があった。ですから，そこを希望すれば徴兵逃れができた。

それは僕の親からしたら，そちらへ行ってほしかったんです。僕はあとから考えると，親不

孝なことをしたなと思います。おやじは，徴兵逃れを望んでいたけれども，やはり息子の志を優先してくれた。

僕らの同じクラスには第一次で行った人がいたのですが，その人は特攻隊で突っ込んでいる。そんな同じ年齢の人がどんどん死んでいっているのに，いまさら見え見えの徴兵逃れなんかできるかという雰囲気が，われわれのなかにはありました。日本人は，そういう雰囲気に弱いんです。これは山本七平が『空気の研究』に書いているのですが，一度そういう雰囲気ができあがってしまうと，それに抵抗できない。

ですから，私のクラスは40人ですが，そちらへ行ったのは１人だけ。これは勇気があると思います。あとの連中が誰も行かないのに，１人だけ徴兵逃れの道を選んだ。僕はその人は偉いと思う。しかし彼は，戦後クラス会をやるからと何度呼んでも，「俺は君たちに会わせる顔がない」と言って出てこない。その気持ちもわかるんですけどね。彼は帝大の農学部へ行って，獣医学科を選び，府大の獣医学の教授になっています。

そういうことで，私のクラス40人のなかで，公然と徴兵逃れのできる道を選んだのは１人だけです。それは現在ではわかりにくいと思いますが，山本七平氏のように，日本ではそういう雰囲気というか，空気というか，これが絶大な力を持つ。そういうことがあると思います。

それは二・二六事件や五・一五事件などいろいろありますが，そういうときにもあったのではないかなと思います。二・二六事件の青年将校たちが歌っていた昭和維新の歌はご存じですか。

阿部　聞いたことはございますけれども，覚えていません。

村田　あれは，なかなかよくできた歌で，僕たちはよくそれを歌っていました。うっかり歌っていると憲兵ににらまれるので，ひそかに歌い，われわれの仲間では口伝えで教えあっていました。

菅　やはりそういうのも，そもそも文科を選んだという時点で，ある程度の覚悟がおありになって，その道でやっていこうという固いご決心をされていたということなんでしょう。

村田　周囲からは盛んに「理科へ行け」と言われました。

菅　学校の定員も理科のほうが増えて，文科はずいぶん少なくなっていたころではないですか。

村田　ええ。だいたい私は，ちょっとあまのじゃくなところがあるんです。先ほどの，英語がだめなのに文甲を選ぶとかね。

私のクラスに入ってきている連中でも，文乙を第一志望にしていて回されてきていた人もかなりいました。

寮生活

菅　先ほど寮のお話がありましたけれども，先生は難波のお生まれで大高までの距離は近いですよね。大高は全寮制だったのですか。

村田　全寮制です[1]。これはありがたかったと思いますね。その寮のなかで学生同士が切磋琢磨する。これは教育で非常に重要なことではないかと私は思います。先生が生徒を教えるのも一つの教育ですが，生徒同士が切磋琢磨する生徒間教育と言いますか，これも非常に重要ではないかなと。そして，それができたところが旧制高校だと思うんです。

---

[1]「寄宿寮については，最初は地方出身者に限定して自由入寮制をとっていたため空室が多く，寮生活を共にする教官もあったが，次第に入寮生が増えるにしたがって賄いに対する不安が高まり，1925年４月から寮生の希望によって生徒による自炊制度が認められた。その後漸次１年皆寮にすすみ，1935～1940年頃は皆寮制によって寮が一段と充実したが，時局の逼迫によって1940年９月自炊制度が廃止されている。」（大阪大学五十年史編集実行委員会編『大阪大学五十年史　通史』大阪大学，1985年，91頁）。

勤労動員

村田　特に旧制高校のなかでも，僕らのような学徒出陣の状況に置かれていた者は，本当に真剣に生徒同士で勉強しました。われわれのときには大阪製綱というところで勤労動員がありまして，そこで壊れた溶鉱炉を直すような仕事をしていたのですが，危ないところで，弁当を食べていても火の粉が降ってきたり，いつ爆発があるかわからないというような場所でした。

朝集合して，向こうからの指図を待っているとき，そんなときこそ僕らはお互いにいろいろな議論をしている時間だったのですが，やっと向こうから係の人がやってきて指示をすると，そのときのクラス代表の男は清原のようなタイプで剣道何段かだったのですが，剣道で鍛えた力のある声で「この非常時に学生を集めて半時間もほったらかしにしておくとは何事か」と，その係の人に怒鳴りつけました。それから，文科の学生は使いにくいとお払い箱になったんです。

お払い箱になって何をしたかというと，今度は大阪市内のあちこちに貯水池を掘った。大阪市内が焼けたときに貯水池がないと水の便が悪いですから。セメントがないので粘土を分厚く固めてつくるのですが，これは露天だし，空気もましだし，隣組の人がいろいろな差し入れはしてくれるし，休憩時間も多いしということで，こちらのほうがはるかによかった。ですから勤労動員の終わりのころは，もっぱら貯水池づくりの仕事をしていました。そのときに一番，友だち同士で本当の勉学ができたというか，そういう気がします。

私の女房は23年前に亡くなったのですが，その女房は私と同じ年なんです。大阪女子大の英文科を出て府立高校の教員になったのですが，その女房は「私らの青春は勤労動員でめちゃめちゃやった。勤労動員で授業はないし，本当に青春を犠牲にしちゃった」と言う。

しかし，私は全然そうは思いません。むしろ，われわれの青春は本当の意味での勉強ができたというか，学校の勉強だけではなく，真剣な友だち同士の切磋琢磨というようなことができたなと思っていますので，いつでも「わが青春に悔いなし」と，そういうつもりでいます。その点は女房の場合と違うなと。やはり，旧制高校に行っていて，寮生活などがあったおかげだなと思いますね。

菅　その最後のころになりますと，まだ授業はあったんですか。

村田　いや，最後のころは勤労動員ばかりです。ですから，２年生のときまでは授業がありましたけれども，３年のときは授業はほとんどなかったです。

菅　それは，１，２年生のときからの周りの学友たちとのお付き合いがあったからこそ，３年生のときに動員になっても。

村田　ええ。先ほど橋本峰雄の話をしましたが，そのほかにも，ずっと大阪高裁で判事をやっていて，いまは弁護士をやっている男がいるのですが，その人などともいろいろやりました。彼の言った言葉で覚えているのは，「死ぬことぐらいヘッスいことはない」と。「ヘッスい」というのは，ドイツ語の「ヘッスリッヒ」を日本語にしているんですが，「嫌な」ということです。それを考えたら，どんなことでも忍耐できるのではないかと。その言葉は覚えていますね。

軍隊生活

村田　軍隊に入ると，とにかく古年次兵のいじめというのはすごいんです。特に僕らは学徒ですから，すぐに将校になるでしょう。いまのうちにいじめておけということで，めちゃめちゃないじめをやられた。これは野間宏の『真空地帯』なんかを読んでいただくとわかりますが，すごいいじめを受けるんです。そんなときには，いつも，その裁判官になった男の言葉を思い出

して耐えました。

そのときに，われわれより１年上に，私と小学校，中学校，大学まで一緒だった大阪ガスの専務をやっていた有名な人がいたのですが，この人はだいたいが坊ちゃんですから，そんないじめに耐えられなくなってトイレで首を吊ってしまった。ところが失敗して，それから少しいじめがましになったという話もあります。僕らが入ったときには，それもちょっと聞いてはいたんですけどね。

軍隊でのいじめ，特に学歴のある連中に対する古年次兵のいじめというのは，猛烈を極めるというか，そういうところがありました。ただ，内地の場合が一番ひどいんです。外地では，それほど古年次兵のいじめはきつくない。なぜかと言うと，外地であまりひどいいじめをやると後ろ玉を食らわすぞと言うことがある。味方に後ろからやられるという恐れがあるわけです。だから，外地では内地のようなひどいいじめはやらないというのが普通でした。

野間宏の『真空地帯』はご存じですか。あれが内地のいじめ。彼は二十三部隊で，僕らは二十二部隊。二十二部隊というのが「またも負けたか八連隊」の八連隊なんです。野間宏のほうは三十七連隊というか，向かい側にあったあれなんですけれども。

野間宏の妹を奥さんにもらっている富士正晴も面白い小説家なんですが，彼は僕らと同じ戦線へ行っています。富士正晴は『帝国陸軍に於ける学習・序』で戦地での二等兵のありようとかを書いているのですが，あえて彼が内地での新兵いじめを書かなかったのは，野間宏が書いているから充分だと思ったのだろうと思います。

部活動

菅　話が元に戻って高校生活のところに返りますけれども，先生はたしか弓道部でご活躍だったと思います。そういった運動部関係のことで何か思い出がございましたら，お話しいただきたいのですが。

村田　私は弓道部の最後のキャプテンということで，いまでも弓道部のいろいろな行事や総会などは全部やっているんです。

私は身体が弱かったものですから，小学生のころ，おやじが「住之江に弓道場ができたので一緒にやるか」と言って，健康のために弓道をやっていました。普通はみんな高校へ来てから始めますし，中学からやっているのは市岡中学と住吉中学あたりがありましたが，僕は小学校のときからやっていたのでキャプテンをやることになりました。

しかし，大高の校長が弓道場を軍隊に貸してしまったので，弓道部の連中は自分の学校の道場で練習ができなくなり，阿部野神社で練習をしていました。大高に限らず，弓道部をなくすという方針になっていたんです。弓道は運動量が少ないと。そういう生ちょろい部はなしにして，激しいもの，スパルタ式のものだけやるという方針に切り替わった。それで私たちも校長に掛け合ったのですが，学校としては軍隊から言われて弓道場を貸さなければいけないことになった，と。そういう返事でした。

菅　ほかの学校との対抗戦みたいなことはあったんですか。

村田　私がキャプテンのときは，弓道部の歴史上最高潮のときで，近畿一円全部をなぎ倒しました。ただ，県外の試合には行けないということになったので，姫路高校とかとは試合ができなくなってしまったのですが。

しかし，大阪府内の大阪商科大学予科とか，浪高とかは全部連破して，よく負けていた三高にも勝ちました。また，高槻の高等医専は年齢が僕らより高く，有段者の段の数も向こうのほうがだいぶ多いので，いつも負けていたのですが，これもやっつけた。阪大戦も，みんな３年年上でいつも負けていたのですが，ここにも

勝った。

そんなことで，県外の試合はできなくなったけれども，弓道部としては大いに先輩を喜ばせた時代だったんです。

菅　大高全体ですと，昔は松江高校との対抗戦とかがあったと思うのですが，そういうのは戦争の影響で中止になっていたんでしょうか。

村田　野球部などは松江との定期戦がありましたが，弓道部はなかったですね。高知はあったと思いますが，高知にはたいてい負けていました。

弓道には小笠原流と日置流という大きく分けて２流派があります。大高や三高や浪高は小笠原流ですが，小笠原流は馬上で打つ。それに対して日置流は徒射とも言って，立ったまま打つ。馬の首がないので初めにぱっと出して，押手という左手が確実に入るわけです。これが小笠原流では，なかなかうまく入りにくい。すると日置流のほうが的中率がよくなる。

高知は日置流なんです。姫路もそうだったかな。そんなことで，たいてい大高は負けていました。その一つの原因には，小笠原流でやっているか，日置流でやっているかということでもあったのですが。

文化祭

村田　それから，われわれが大高に入ったとき，文化祭というのは生徒が立案して，生徒が講師を呼んでくるんです。講師料は学校が出してくれますけどね。

それで，われわれが入った年は３年生がいませんので，２年生が主体で，呼んできた講師が湯川（秀樹）さん。そのころ，まだ湯川さんはノーベル賞をもらっていませんので，湯川さんを知っている人は極めて限られており，物理学をやっている特殊な人しか知らなかった。

なぜ一般に知られていない湯川さんを呼んできたかというと，大高には理科丙類があって，丙類はフランス語が第一外国語なのでフランス語の先生がいる。桑原武夫さんがフランス語の先生をやっていたのですが，湯川さんは桑原さんの三高のときの友だちなんです。ですから桑原情報で「こいつは偉いもんになるぞ」と。まだ誰も知らないけれどもノーベル賞クラスの学者だという情報を，僕らの上の連中が聞いて，そんな人だったら一度呼んでこようと呼んできたんですね。

それで湯川さんがいろいろ話してくださったのですが，質問のときに出てきたのは，その当時，原子爆弾のことがいろいろな小説に書かれていたので，「小説に書かれているような原子爆弾というのは可能ですか」と誰かが聞いたわけです。そのときの湯川さんの回答は，いまでもはっきり覚えています。「理論的にはまったく可能です。しかし実際につくるとなると，技術面では越えなければならないハードルがたくさんあるので，そう簡単にはいかんでしょう」と。

そのころ，アメリカではアインシュタインをはじめとする人たちが一生懸命やっていて，ドイツも一生懸命にやっていた。とにかく原子爆弾をどこが最初につくるかというのが一番問題になっていたわけですが，そのときの湯川さんの回答は，そんな回答でした。そのことは，よく覚えています。

では，僕らの年に誰を呼んでこようかということで，土井晩翠を呼んでこようということになった。そのころ，僕らは彼の詩をいろいろ知っていて感銘を受けていましたので。しかし，土井晩翠は90歳ぐらいだし，二高の名物教師なので仙台にいる。「えらい歳だし来てくれるかな」と言っていたのですが，とにかく一度，電話してみようということになって仙台へ電話をすると，土井晩翠は「行きましょう」と言ってくれたんです。びっくりしました。「晩翠，来てくれるで。せやけど大丈夫かな」と。

それで来られたのですが，来られたのを見る

と棺桶から出てきたみたいに顔は土色で，ひょろひょろ。教頭の介添えでやっと壇上まで上がった。こんなので話せるのかなと思ったのですが，すごいですね。壇上に立って話しだしたら，気迫というか何というか，これには圧倒された。詩人というのは，すごいなと思いました。

話の内容もいろいろと覚えています。文部省はいろいろな歌を歌わせていて，いま一生懸命に歌わせようとしている『見よ東海の空あけて』という歌があるけれども，「あの歌は，曲はよろしいけど，詩はなっていませんね」と。そのころは特高警察がうろうろしているころですから，そんなのを聞かれたら危ないと，こちらはひやひやしていたのですが。「だいたい，『見よ東海の空明けて，旭日高く輝けば』と言うけれども，旭日が高く輝くもんですか。旭日と言えば，地平線から上がったばかりで低い。だから『旭日高く輝けば』なんてめちゃめちゃだ」というふうに，のっけから，こちらの肝を冷やさせるような発言がいろいろありまして，本当に面白かったです。さすが晩翠だと思ってね。

あれは「つちいばんすい」と呼ぶのが本当です。「どいばんすい」でも彼はどうということは言いませんけど。二高の名物教師です。私もこのあいだ，二高で120年祭をやるというので行ったのですが，何か話すように言われるかと思って，もし話さなければいけないようになれば晩翠のことを話しておこうと思ったんですけどね。

大高同窓会の活動

村田　大高の代表をしているものですから，あちこちからお呼びがかかると，行かざるを得ないんです。大高の85周年のときには，みんな代表が来てくれているでしょう。ですから，誰かが行かなければ失礼にあたる。それで北は北海道から南は九州まで，日本国中を飛び回っているんです。健康には恵まれていますから，このあいだも九州寮歌祭へ行きましたし，高知の85周年も行きましたしね。

高知の85周年に行ったときには，開会の言葉のところで「今回をもって，旧制高知高校の同窓会活動をすべて終了させてもらいます」と，そういうあいさつです。ですから，なにかわびしさがぬぐい得ないですね。そういう年齢なんです。一番若い人で78歳，私は83歳ですが，もう面倒な活動はできないわけです。ですから，あちこちで店じまいというか，そういう状態になりつつある。だからまだまだ，あちこちに行かなければならないと思っていますけどね。

それで，よく「大高さんは何年に店じまいしはりまんねん」と聞かれるんですが，そのときに私はいつも，「大高の場合は最後の１人になるまで同窓会活動をやりますよ」と答えているんです。たとえ１人でも，同窓会活動は残っているほうがよろしいと。それだけ希少価値が大きくなっているのだからと。旧制高校を体験した人がどんどんいなくなるんですから，やはり体験した者がいるあいだに，できるだけ多くのことを伝えておかなければいけないと言っているんですけどね。

そういうことで，今日もチャンスを与えられて本当にありがたいなと思っております。

菅　いま大高同窓会の方々は，年に何回かお集まりになっているんですか。

村田　ええ。総会は，いつも秋ですか，やっています。そのほかにも各クラブがやっているし，総会のほかには新年会，桜のころには花見の宴「大高桜祭り」がある。これは，ホテルKKRの部屋から大阪城全体の桜がばあっと見えるので，そこを借りて。

それまでは，大高が大阪城の西の丸庭園にたくさん桜の木を寄付しているので，西の丸庭園に桟敷を設けてやっていたのですが，みんな老人でしょう。「こんな地べたに座るのはかなわん」と言われるし，こちらも桟敷を取るのが面倒くさいと思ってまして。ちょうどその頃

KKRがやり出したので，ああ，ここにしようと。そこでずっと続けているんです。

そのホテルKKRで桜祭りをやり始めたのは，僕の前の稲畑勝雄が会長をしているときです。稲畑勝雄は僕のクラスメイトですが，胃をほとんど切らなければならないということになったので，若いところへ会長を持っていこうといろいろ頼んでいたのですが，誰も引き受けてくれない。「俺は手術したら，こんなんやってられへん。すまんけど，君やってくれ」と稲畑が頼むので，助けなければいけないと思って引き受けてしまったんです。だいたい同窓会長は一部上場会社の社長や会長がやってきたので，僕なんかの柄ではないのですが，先ほどの「他者への生」ではないけれども，やはりお互いに助け合わなければいけないと思いますので。

その稲畑勝雄のおじいさんは，日仏学館を始めた人です。だから，おじいさんもお父さんも日仏文化交流の功績で，フランスからレジオン・ドヌール勲章をもらっている。そして稲畑ももらったので，「それはおめでたいからお祝いをしようや」と私が言うと，彼は「あんまり晴れがましいことをやらんといてくれ」と言う。「晴れがましいことじゃない。君の受賞を肴にして飲む大高生の会や」と僕が言うと，「俺をだしにするのやったらかまへん。なぜなら，俺の名前はかつおやから」と（笑）。

それで僕が呼びかけて，大高の連中を集めたんです。ところが，そのころ，もうどこのホテルも詰まっていて，大きな部屋を貸してくれるところがない。それで，やっとホテルエコーが空いていたので，そこでやったんですけどね。

そういうふうにクラスメイトというのは，いろいろ面白い因縁がありますね。クラスメイト，寮の同室，クラブ，みんなそれぞれ本当に抜き難いえにしというか，そういうものがあると思います。

菅　大学時代のお友だちよりも，高校時代のお友だちのほうが深くお付き合いなされると，よくお聴きするのですが。

村田　それはそうですね。やはり大学のときには寮生活とかをしていませんから。

菅　大高もなくなってしばらくのあいだは，阪大の南校ということで校舎自体は残っていたと思うのですが，あれも間もなく取り壊されてしまいまして，大高の方々にとっては非常に寂しい思いをされたのではないかと思います。

村田　あそこの跡へは，大高の記念の銅像とか『全寮歌』の歌碑をつくったのですが，あれも除けなければいけないんです。それの費用は公団のほうがやってくれるんですけどね。ですから，これはそのうちに移動させなければいけません。

それから大高クラブというのが難波にありまして，かなり大きな部屋を借りて，大高生や大高の先生が出版した本を大高文庫として置いていたのですが，その場所が借りられなくなって，大高クラブを閉めなければいけないので，大高文庫をどうしようかと考えていたとき，先ほどの藤澤桓夫のいとこでもあり，漢学者の石浜淳太郎の息子の石浜恒夫が教育委員をしていましたので，石浜さんと産経新聞社副社長の永田照海あたりが市長と交渉して，ちょうど大阪市が文学館をつくる計画があったので，その文学館へ大高文庫を全部入れてもらうという交渉が成立して，大阪市へ移管することになっていたんです。

ところが，文学館は延び延びになってしまった。その文学館をつくるというときには，私も西尾市長と対談をしているんです。その写真は今日持ってきていると思うのですが，そのときにも西尾市長に頼んでいて，やりますという話だったのですが，結局は延び延びになってしまって，いま大高文庫は大阪市立中央図書館の地下６階に入っています。これでは，まったく死蔵されているわけですから，僕が目の黒いうちに何とかしなければいけないと考えて，市立中央図書館の別の部屋で一角をつくってくれと

か言ったのですが，なかなかうまくいきませんでした。

歴史家の脇田修はご存じですか。彼は大高の最後の卒業生なのですが，彼が館長をやっている大阪歴史博物館で，一時はだめだったけれども，いまだったら置けるという場所があるので，そこへ展示してくれと言っているんです。あそこは市立ですから，市から市へ移すのだったら相手も文句を言わないだろうと。市のものを阪大へ移すとか何とかと言うとうるさいんです。ですから，まず市から市へ，歴史博物館のところへ収めるということでやっているのですが，それでも脇田に言わせると，「同じ市から市へでも管理の係が違うとうるさいねん。なかなか簡単にいけへんねん」と。しかし，なんとかそれでいけるのではないかなと思っています[2]。

教育の原点

菅　長時間にわたって，大阪高等学校についてのお話をお聴きしてきました。いまの阪大生に旧制高校と言っても，ぱっと印象が浮かばないというのが実情だろうとは思いますが，いまの若い人に，ぜひとも，こういうことは伝えておきたいということがございましたら，お聴かせいただければ幸いなんですが。

村田　私はいま教育制度がいろいろ言われているでしょう。あの教育改革を見ていて，やはり教育の原点というか，そこをきちんと押さえてやってもらわなければ，派生的な，その場しのぎの対症療法的なことばかりをやっているような気がしてしようがないんです。

何をもって教育の原点と言うかですが，私の場合はこう考えます。永遠の教師と言われている孔子，釈迦，ソクラテス，イエス。その世界の四大聖人がやった教育に共通しているのが，教育の原点と。私は『啐啄』という日本の教育改革を進める会の機関紙に書いて出しているのですが，そのなかに，例えば師弟間の教育だけではなくて生徒同士の切磋琢磨，また教える者と教わる者との人格的な信頼関係等にふれています。

人格的な信頼関係という点では，まだ申していませんけれども，大高の場合で言いますと，一時，マルクス主義活動が盛んだったときがあり，そのときにはずいぶん退学者が出たのですが，そのなかに校長から放校の処分を受けた１人の学生がいました。ところが彼は死ぬまで，自分を追放した大高を愛してやまなかった。そして「俺が死ぬときは，大高の校章の入った布で棺を覆ってくれ」と遺言して死んだんです。それは，そのとおりになりました。

彼は校長から放校を言い渡されたけれども，人間的には信頼関係というか，放校を言い渡した校長も，言い渡された生徒も深い信頼関係があったわけです。そういう人間的信頼関係のうえに立った教育や，私の考えるいくつかの教育の原点，これは四大聖人に共通した教育のあり方ですが，そういうことを『啐啄』の新年号に載せました。

教育ということについては，僕はやはり明治政府がきちんとした理念を持っていたと思うんです。それをもう一度，いまの政府にも考えてほしいなと思いますので，このあいだ，「明治政府の教育理念」という文章を書いておきました。あとで，またお送りします。

菅　それでは先生，今日は本当に長時間にわたりましてありがとうございました。

村田　こちらこそ，本当にいい機会をつくっていただきまして。

村田義人氏略歴

1925年２月３日	三重県津市に生まれる
1937年３月	大阪市立難波元町小学校卒業
1942年３月	大阪府立今宮中学校卒業
1942年４月	国立大阪高等学校文科甲類入

[2] 「大高文庫」は2009年１月13日付で旧制大阪高等学校同窓会から大阪大学総合学術博物館に寄贈された。

	学
1944年９月	国立大阪高等学校文科甲類卒業
1944年10月	京都帝国大学文学部哲学科宗教学専攻入学
1944年９月15日―1946年２月	徴兵により８連隊に入隊
1949年９月	京都大学卒業
1955年３月	京都大学旧制大学院終了
1950年３月	母校大阪府立今宮高校に社会科教諭として奉職
1975年３月	大阪府立牧野高校教頭
1979年３月	大阪府立藤井寺高校教頭
1981年３月	大阪府立堺東高校校長
1983年３月	大阪府立北野高校校長
1985年３月	大阪府立北野高校校長定年退職
1985年４月	東大阪短期大学教授，兼金蘭短期大学非常勤講師（社会学），兼天理大学非常勤講師（哲学的人間学），神戸新聞文化センター・朝日新聞文化センター・毎日新聞文化センター・読売新聞文化センター・産経学園文化センター・山陽新聞文化センターにおいてカウンセリング研究講座を開講
1992年３月	東大阪短期大学退職
1998年９月	岸和田健老大学学長，岸和田健老大学理事
2006年９月	岸和田健老大学学長退職，岸和田健老大学理事として現在に至る

Memoir of the Osaka Senior High School talked by Mr.Yoshihito Murata

Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Mr.Yoshihito Murata related to the history of the Osaka Senior High School, which was merged into Osaka University in 1949. After Mr.Murata entered the school in April in 1942, he studied philosophy very hard, made good friends, and enjoyed *kyudo* (the Japanese art of archery). However, as Mr.Murata's school days were in the wartime, he and his friends were obliged to graduate from the school half a year earlier than in the former normal period of three years. In addition, just after the graduation, Mr.Murata was mustered by the Japanese army, and was dispatched to the battlefield in Mainland China. It was in the postwar days when Mr.Murata could again study philosophy in Kyoto University.